

22回を振り返る

—第3回報告会を開催して—

NPO 法人 教育支援グループ
Ed.ベンチャー



【第3回報告会開催】

東日本大震災支援の第3回報告会が、10月13日（木）に行われました。陸前高田学校支援、陸前高田モビリア子ども支援（すたんどばいみー）、石巻万石浦子ども支援、福島富岡町学校再開支援、それぞれの支援の経緯と今後の支援の方針が出されました。



■陸前高田学校支援 前号でも紹介しましたように、平成23年度後期の学校支援は、福祉医療機構の助成を受け、現地スタッフのニーズ把握をベースに始めております。既に、ニーズ把握、現地業者による物品納入、Ed.ベンチャーからの支払という一連の流れが動き始めております。また、現地スタッフの動きも活発で、きめ細かいニーズ把握がなされております。

その中で、最も重要と思われるのが、平成24年度以降の消耗品費に関する学校の心配です。例えば、「ユニセフが9月末で物資支援を終了するという連絡があった」というように、少しずつ支援が後退しているようです。だからといって、地域の状況が格段に良くなっているかと言えばそうではなく、陸前高田の町は、瓦礫が移動し、平地が少し増えた、という以外には、大きな変化が見られません。「今年は過ごせても、次年度以降はどうなるか…」そのような不安が既に出始めているのもうなずかされます。一方で、Ed.ベンチャー事務局の調べによれば、震災支援への助成金は現地NPOを中心に助成される傾向があるとのこと。とすれば、次年度以降のEd.ベンチャーからできる支援の可能性はかなり低いこととなります。

そこで、企画されたのが、学校支援を目的とした現地NPOの設立です。Ed.ベンチャーがこれまで行ってきたことに近い支援（いや、もっと現地に密接な支援になると思われませんが）を行える団体を現地に立ち上げることです。10月15日には、教育委員会関係者を訪問し相談の結果、現地団体の立ち上げにご協力をいただけることになりました。11月上旬には、現地で団体づくりの発起人の会を行えるように進めていきたいと考えています。「お金の心配がない」という状態での学校づくりができる基盤整備のお手伝いできればと考えています。

■モビリア子ども支援（すたんどばいみー） 被災経験を持つ子どもたちと、外国人としての生きづらさを抱えながら当事者運動に取り組む「すたんどばいみー」の若者たちとの出会いには、どんな意味があったのでしょうか。始めは、ただそばにいてあげる大人として毎週顔を合わせているだけでしたが、「それで子どもたちのニーズに応えたことにはならない。すたんどばいみーにしかできない支援を…」と考えたとき、被災の経験を言葉として子どもたちがまとめていくお手伝いをスタートさせます。それは、外国人としての自分を、少しずつ言葉にすることで「外国人としての自分」を獲得してきた経験を持つ「すたんどばいみー」だからこその結論だったようです。自分自身が経験

する（経験した）苦しい出来事を、言葉にして客観的に整理していくことは本当に大変な作業です。しかし、その作業抜きには、「経験を乗り越える」道がないことを、すたんどばいみーのメンバーは知っています。根気強く聞き取った子どもたちの言葉をつなぎあわせ、そして、外国人の自分たちの言葉も提示した「中締め」のイベントは、そうした言葉の重さを知っている「すたんどばいみー」らしい誠実さに満ちていたように思います。

支援は現在「ちょっと中断」していますが、それでも時には子どもと電話連絡をしながらはげまし、次に取り組むべき「なにか」を模索しているようです。

■石巻万石浦子ども支援 8月で万石浦中学校の教室が使用できなくなったことから、子どもたち支援の場が地域へ出たの活動となりました。そうした状況の変化をきっかけとして、支援の質も大きく変化し始めています。

万石浦 サポートセンターという仮設の大きな集会場を本拠地として支援活動を続けていけることになりましたが、ここにはガスも電気も完備しているので、子どもたちとゆっくりとお昼ご飯作りなどに取り組んだり、避難所の畳を入れたことから、落ち着いて休める空間にもなりました。この新たな拠点と子どもたちが外遊びする広場は、周りが住宅地や仮設住宅・アパートだったりするために、地域からは子どもたちと支援隊の動きが「丸見え」です。子どもたちの元気な声を聞いてまず集まってくるのが近所の子どもたち。ライオン隊の外遊びには必ずニューメンバーが見られます。また、ライオン隊のメンバーが、「自分の友達だから連れてきた…」とあって、新たなメンバー候補と一緒に朝に顔を出します。こうして、子どもたちの顔ぶれが増え、いままでの「万石浦避難所」の子どもたちという枠組みが、「地域の子供たち」へと対象が広がり始めています。しかも、それは子どもたちに限ったことではありません。仮設や近所のお年寄りが、「何をやっているのか？」と興味を持たれてのぞきにも来ます。そこには子どもたちの明るい活気があるからでしょうか…。

一方、仮設住宅に活気が感じられないのも事実です。避難所を出たことで、「孤立化」という新たな問題が地域に出てきているのではないかと心配にさえなります。

こんな変化を受け入れながら、支援も形を変えていきます。まずは、11月の支援では、希望する地域の子供たちもメンバーに入れて、「秋の遠足」に出かけます。バスを使っての仙台空港、松島水族館の見学です。1月に予定の「学習旅行」の下見も兼ねています。同じ11月の支援では、遠足だけでなく人形劇の鑑賞も計画しており、地域の子供たちにも開くとともに、表現力や学習力を育てていきたいと考えています。

また12月後半には、仮設住宅で孤立しがちな高齢者を対象に、大衆演劇一座の公演を行い、ライオン隊の子供たちに、招待したおじいさんやおばあさんの接待役をやらせようと思っています。万石浦支援の助成金が取れなかったため、予算面は厳しく現在はめどが立っておりません。しかし、避難所の閉鎖に伴い「避難所支援から地域支

援へ」とニーズが変わったことを受け入れ、ちょっと無理しながらも、できることを継続的に取り組んでいきたいと思えます…来年3月11日を過ぎるまでは…！

■**福島富岡町学校再開支援** 4月から始まった東北震災支援では、どこに行っても「地域・学校・家族そして弱い立場の子ども」の関係性が問題として浮かび上がってきました。それは、震災によって十分に機能しなくなってしまった、または歪みが生じてしまったそれらの有効性をどのように回復させていくのかという課題です。

工場の稼働する大きな音が響く一角の建物を間借りして、やっと再開した二つの小学校と二つの中学校、そして一つの幼稚園。廊下の両脇にパーティションで間仕切りされて作られた教室は、片側ずつが一つの学校です。職員室も狭いながら学校ごとに区切られ、それらの様子は、まるで4つの学校と1園が小さな一つの建物に避難してきたかのようにも見えます。こうした不十分な条件の中での学校再開の目的は、子どもたちへの教育保障だけではありません。原発事故によって故郷から避難せざるを得なかった家族たち。日本のあちこちに散らばっての生活は、いままでの地域社会と切り離されたところでのスタートです。戻れるかどうかかわからない不安や、新しい生活に適応すればするほど、富岡町は遠い存在に感じていくことでしょうか。まさしく、町が、地域が、消えて行ってしまう……。そんな危機感のもと、「学校があれば地域はあり、町はある」という理念によって、地域の象徴としての学校再開だったのです。冬には、全国に散らばった生徒たちを集め、大きなイベントを行う計画が進んでいるそうです。

地方に原発を押しつけてきた私たち。その原発によって喪失されそうな地域を何とか守ろうとする学校再開。今までの矛盾を私たち自身が整理しながら、学校再開を応援していきたいと思えます。

【学校が直面している課題②】

前回の支援通信で学校が直面する課題①として、子どもたちが生活をともにする家族の状況が、「核家族用の仮設住宅」というインフラによって家族構成が変えられ引き起こされていることに触れました。今回号で触れたいのは、「間借り」という学校再開が引き起こす問題です。

陸前高田には、小友小中学校、広田小中学校、長部・気仙小学校という3地区で、学校の再開は「間借り」となっています。借りる側になっているのは、小友中学校・広田中学校・気仙小学校です。震災40日後、「学校再開」が第一の目標となっている時には、間借りであっても再開できることであったように思います。しかし、そうした形で再開して学校の日常が取り戻されるようになると、間借りしている学校側には、大きな問題が出てくるようになります。それが、教育課程です。

日本の学校は、文部科学省の学習指導要領などによる制約を受けながらも、学校独自に教育課程を組むことができます。しかし、間借りとなると、そうした「独自性」が失われ、もともとそこにある学校の教育課程の隙間をぬって、教育課程を組まざるをえないわけです。「子どもの状況にあわせた学習をしよう」と考えても、体育館・校庭・特別教室などの使用にはどうしても制限がかかります。ただし、中学校が小学校の間借り再開をしている場合と、小学校2校が一緒に再開している場合では、この問題の深刻

さも異なるようです。というのは、小学校と中学校では、そもそもの教育課程に大きな違いがありますが、小学校2校が一緒に運営され、教室が不足している長部・気仙小学校では、現在、長部小学校の教育課程を気仙小学校の子どもたちがこなしているという状態になっているわけです。「気仙小学校には気仙小学校の子どもを育てる教育課程があるはずなのに、それができない」ことは、地域のコミュニティの中で、地域に支えられ、地域を支えてきた「学校」という存在にとって大きなダメージになっているようです。「統廃合」という結果ならば、そこには統廃合の結果ならでは学校の姿あるわけですが、そうした過程もなく、長部小学校の教育課程に引きずられている気仙小学校にとっては、新たな場所と新たな形での学校再開が強く望まれているようです。

万石浦での「大衆演劇」公演にご寄付ください!!

「市川富美雄一座」に公演依頼をお願いしたところ、仮設集会所での公演をお引き受けいただくことができました。しかしながら、それでも最低の必要経費(30万円)が必要となります。現在の寄付等をやりくりして捻出できている金額は10万円です。この企画にご賛同いただけます方、是非、ご寄付にてご協力下さい。

【支援隊活動記録 10月6日～10月18日】

■陸前高田学校支援

○10月15日(第24回)教育委員会との今後の支援に関わる相談、現地スタッフとの打ち合わせ、地元業者への支払い(山十、三上教材)、熊谷教材社との打ち合わせ

□支援隊メンバー:清水睦美(東京理科大学)、柿本隆夫(引地台中学校)

□支援物資(現地スタッフによるニーズ把握、地元業者納品、支払):理科備品・消耗品(気仙中学校)、プリンターカートリッジ・ホチキス針・クリップ・フラットファイル・PPC用紙・算数/漢字学習/国語各ノート(広田小学校)、布ガムテープ・画鋏・掃除機(小友中学校)、トイレマジックリン・氷嚢・インク・キャノンカートリッジ(広田中学校)、コピー用紙-A4・B4各3箱(気仙小学校)、ケント紙(小友小学校)

□現地ニーズ必要経費(陸前たがだ八起プロジェクト):USB・インクカートリッジ・キャンパスノート・コピー用紙・フラットファイル・ガソリン代

■ご協力いただいたみなさま(敬称略、順不同、物資・寄付を含む)10/6～10/2

(株)スタッフ<理科薬品提供>、藤田健志(日本女子大学)、権田和子(元中学校教諭)

今後の継続的な支援の活動のために広く寄付を募っております。

横浜銀行 中央林間支店 普通6018180

Ed.ベンチャー東日本大震災支援 (Edベンチャーヒガシニホンダイシンサイシエン)

NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和市中央林間 3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp

